

安曇野市観光振興ビジョン委員会

第2回委員会議事概要

1	委員会名	第2回安曇野市観光振興ビジョン策定検討委員会
2	日時	平成24年5月11日(金) 13:00-16:30
3	会場	穂高支庁舎 大会議室
4	出席者	増田委員、川崎委員、樫井委員、清水委員、金井委員、松本委員、小岩井委員、加渡委員、上條委員、等々力委員、宮崎委員、中村委員、浅川委員、岡本委員、河崎委員
5	市側出席者	村上副市長、大内商工観光部長、曾根原観光課長、高山係長、山本主査、受託事業者
6	公開・非公開の別	公開
7	傍聴人	
8	会議概要作成年月日	平成24年5月 日

- 会議事項
- 1 開会
 - 2 委嘱状交付(人事異動に伴う団体推薦委員へ)
 - 3 委員長挨拶
 - 4 議事
 - ① ワークショップ議論用資料説明
 - ② 議題Ⅰ 安曇野観光の理念(目標増)とは
 - ③ 議題Ⅱ 安曇野の観光のあり方とは
 - ④ 意見交換
 - 5 その他
 - 6 閉会

議事録(概要版)

(1) ワークショップ議論用資料説明

○事務局より資料1~3、参考資料について説明

(2) ワークショップ

○3つのグループに分かれて、「議題1 安曇野の観光の理念(将来像)とは」、「議論2 安曇野らしい観光のあり方とは」について議論

(3) 意見交換

委員(グループ1・発表役)

- ・ 安曇野の観光の理念について、安曇野には北アルプスには自然とそこに生きている農家や堰に代表される人の営みがあり、ただの自然ではなく人との関わり感じられ、調和した資源があるということが安曇野の魅力ではないかということが議論された。観光資源を見ていったとき、北アルプスだけでなく堰や屋敷林といった小さな魅力がたくさんあり、それらを観光客が体験できれば良いのではないか。
- ・ 観光とは何かという議論では、理念と産業は反するものではなく、理念に根ざした観光でなければ産業は成立しないため、理念を明確にしていこうという議論をした。

- ・ 安曇野が何を誇りにしているのか、明確に打ち出すことが理念でないか。具体的には、「自然と農に生きる人たちが暮らす安曇野」、「自然を生かしたエネルギーを作り出している安曇野」といったもう少しとがったものを積極的に明確に打ち出していこうという議論をした。

委員（グループ1）

- ・ 観光の議論をしていくと半分はまちづくりの議論になる。今までの狭い観光の考え方ではなく、市民も含めてまちづくりをすることで観光につなげていくということを理念や基本方針で明確にしていくべきである。

委員（グループ1）

- ・ 安曇野を訪れる人たちが一緒になって安曇野の自然を守り、農産物を作っていくというプログラムを作ろうという議論をした。
- ・ 安曇野に住んでいる人たちが守りたいものは、安曇野の景観である。観光と景観が対立してはならない。住民が大切にしている安曇野の景観を観光客も一緒に作っていくということが基本の理念である。

委員（グループ1）

- ・ 観光というものを起点にして、安曇野という生き物の循環、ネットワークの核を作っていくことがポイントではないか。観光を核にして宿泊産業だけでなく景観や農業など、住民が守りたいものを守っていくためのネットワークづくりの道具とするのが観光ではないか。

委員（グループ2・発表役）

- ・ グループ内で出てきた理念に関する意見をグルーピングしていくと「景観」「経済」「まちづくり」「交流」の4つのグループに分かれた。これらのグループの共通点として「ふるさと」というキーワードが出てきた。都会にはふるさとなない方も増えてきており、安曇野がそのような方のふるさとになることができるという議論をした。
- ・ 「日本のふるさと」を理念として考えていくと、観光のあり方としては「安心・安全」というキーワードも出てくるのではないか。そのためにはふるさとの「魅力づくり」が必要であり、地域住民も含めた中で魅力を作っていくことが必要である。その魅力づくりは、景観だけでなく、安曇野全体のブランドづくり、風景や農業の継続にもつながっていく。農業などの「体験」や人との「おもてなし」、観光事業者だけでなく住民との「ふれあい」につながる。最終的にはその魅力を伝えるために「情報発信」も必要であるという意見が挙がってきた。

委員（グループ2）

- ・ グループ2は理念も基本方針も「ふるさと」をキーワードに考えていった。住民だけでなく来訪者にも参加してもらうなかで「ふるさとづくり」を進めていくという議論をしてきた。観光の定義はいろいろあるが、既存の観光という定義では安曇野は捉えられない。住んでみたくなるようなふるさとづくりが安曇野の観光ではないか。
- ・ ふるさとづくりを来訪者と一緒に取り組んでいくと考えると、欠かせないものとして農業の振興がある。水田に水をはるなど人工的な安曇野の景観を支えているが、そこにも来訪者の体験・交流を加えているいろいろな取り組みを行ってはどうか。市民のおもてなしの心は、体験・交流を通じて直接、観光客と交流するなかで育まれていくだろう。そのような中で、安曇野の魅力をきちんと発信していくことは必要であり、情報戦略や体制を構築していくことが方針に入るのではないか。

委員（グループ2）

- ・ 安曇野は観光地なのか、と考えることがある。地元で生まれ育った方は、大勢の観光客が訪れて、町はずいぶん景観が破壊されてきたと感じている住民もいるのではないか。第1回の委員会で、「理念」といっているうちに、観光事業者の経営母体がなくなってしまうとどうするのか、という意見があったが、

そのことも忘れてはいけない。観光ビジョンという安曇野市の未来を考えるとときに、観光という言葉を一人歩きさせてはいけないと感じている。

- ・ 日本人が忘れてしまっている「ふるさと」、乾燥した心を癒してくれる「ふるさと」という大きなくくりで、ビジョンが定着していけば良いのではないかと感じている。

委員（グループ3・発表役）

- ・ 理念としては、生活そのものが観光ではないか、切り離せるものではないという意見が多かった。その中でキーワードとして、「いやし」、「心」（心のあたたかさ、心のふるさとなど）、「人」（人と人のつながり、住民間のつながり、住民と来訪者とのつながり、業種内でのつながりなど）、「自然」、「産業の関わり」など多く挙げた。また「エコ」についても環境、自然、文化、交通などにもつながり、「エコ」をキーワードに話が広がった。
- ・ 安曇野らしい観光のあり方としては、「参加型」「体験」農業や文化などの参加や体験に関する意見が多く挙げた。「連携」としては、美術館等との連携や産業間の連携、そのような中から新たなお土産なども生まれてくるのではないかと意見が挙げた。

委員（グループ3）

- ・ 安曇野には「松本城」「善光寺」のような4番打者がいないため、みんなで固まって一つの方向目指すためには横のつながりが非常に大切である。住民や業者にも横のつながりが無い。現在「くらとま」（安曇野で暮らすように泊まる実行委員会）という取り組みをしているが、そのような横のつながりをつくっていくことが重要である。
- ・ 観光というのは安曇野での生き様だと考えている。生きている姿が本当の観光につながる。いかに6次産業を発達させるか、自分の作ったものいかに自信をもって売ることができるか、それが最終的に観光につながり、さらに安曇野が楽しいまちになる。
- ・ 我々も屋敷林のプロジェクトを行っている。実際に基金を作ったり、葉っぱを片付けに行ったり、そういうつながりや交流をもち、助け合っていくことが地域を守ることになる。
- ・ 住民にとって平凡なものも他の人にとっては違う（価値観が違う）。まずは住民が自分の住んでいるところを理解した先に観光がある。
- ・ 自分たちが提案するだけでなく、実行することが大切である。実行することで初めて理念が現実になる。現場に出て、実際に体験をして、私も5月までに4000人の方を案内して多くの反響をいただいた。肌で感じているからこそいろんなことができる。その方向性を共有化することが観光につながる。

委員長

- ・ 各グループでの議論は、そんなにかけ離れたものになっておらず、同じベクトルを向いてきているのではないかと。

（自由討議）

委員

- ・ 安曇野を訪れる人ともに自然や景観を守るやり方があるのではないかと。例えば、屋敷林を守っていく活動は安曇野の人たちが取り組んでいる。安曇野で暮らす人々の生き様や思いが観光客を呼ぶプログラムになるのではないかと。屋敷林だけでなく、安曇野の農業を守っている人の活動を宿泊施設と組んでプログラムにしていく。地元の人が頑張っているから応援しようと訪れるので、まず地元が安曇野を知っていく活動が必要である。

委員

- ・ 増田委員の意見は、地元からの視点であるが、観光客が来訪することで住民に安曇野のすばらしさを知らしめることもある。市民にとって当たり前と思っていることを観光客が多く来訪しているのを見て、改めてその価値に市民が気付くということもある。

委員

- ・ 観光客側の視点、市民側の視点、どちらの方向もあるが、それらを活かすセンスは観光事業者の役割ではないか。

委員

- ・ 安曇野案内人倶楽部では、体験を通じて安曇野を知ってもらう活動をしている。体験型観光を通じて、農家等にも観光に参加してもらっていく。自分が作ったものを観光客に売ることによって自信が付き、6次産業につながっていく。有名な地点を巡ることだけが観光ではない。わさび田に入って水の冷たさを感じて安曇野を知ってもらう、このような体験があちこちでできれば行きたいと感じてもらえ、観光につながっていくのではないか。

委員

- ・ 市民アンケートの結果を見てみると、必要だと感じている観光施策として景観の保全、自然資源の保全に対する回答がもっとも高い。ここが市民の考える観光である。ここに安曇野が考える観光のヒントがあるのではないか。

委員

- ・ 観光ビジョン策定という、観光業者が儲かることを考えると多くの人が思ってしまう可能性があるが、安曇野の景観や自然を良い形で発展させていくということが今回の議論の大きな方向であったと感じた。

委員

- ・ 最終的には、お客様に喜んでいただいて、その喜びの代償として代金をいただく。観光でもっとも大切なことは、言いつばなしにはしないこと。方向が決まったら、それを実行することが私の仕事である。

委員長

- ・ 本日は安曇野観光の理念やあるべき姿を議論する中で、安曇野らしい観光とは何かというところまで議論してもらい、ビジョンの骨格を議論するという作業をしてもらった。色んな課題が網羅されており、本日の議論をふまえて、次回、事務局よりたたき台を出してもらいたい。
- ・ 本日の議論で感じたのは、「観光」という言葉に不信感が強いということ。これまでの観光の当事者である観光業者の進め方と、一般市民の考え方とに齟齬をきたしていると感じている。この観光ビジョン策定委員会も今までの観光と違う議論をしているはずだが、一般の方々には「また観光事業者の一部の人が集まって観光事業でどうもうけるかを考えているのだろう」と受け取られてしまうのが、観光という言葉の軽さであり、そのことを承知しておくことも大事。
- ・ 観光というのはお客様に来てもらって、地域を味わっていただき、それで地域にお金を落としたり、利益や知恵を落としてくれたりして、地域も来訪者も元気になるという活動であると思うが、その進め方について今までいろんな議論が散漫にあった。本日の各班での議論や発言を聞き、安曇野の観光については一定の方向にかなり向かっていけるのではないかと確信を持った。個人的にはビジョンを作り上げていく中で、観光という言葉を使わないということも検討していくべきかもしれないと感じている。
- ・ みなさんが発言された安曇野の理念について、この安曇野の自然や人のくらしをどのように大事にし、後世に残していくか、そういう中で来訪者とうまくマッチングをして、そういった作業に資するようにしていくか。そういった観光の方向に持って行こうではないかという話があった。その理念をどのように具体化していくかが一番のポイントだと思う。審議会や県等あちこちでたくさんの報告書が有識者を交えて作られているが、それが全部できていれば、このような長野県ではないはず。そういう意味で、これを具体化することが必要であり、自らが担い手になるという気概も必要。あるいは、来訪者と市民でこれを作り上げていくのかという観点をもっと持つことも必要である。ビジョンを出して終りというのではなく、具体化をしていくということを念頭に委員会を進めていきたい。